

第19回県政知事懇談

湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成22年11月27日（土）
ところ 世羅町甲山保健福祉センター

広 島 県

目 次 頁

| | |
|------------|----|
| 開 会 | 1 |
| 懇 談 | 2 |
| 自由討論 | 36 |
| 閉 会 | 39 |

開 会

(知事(湯崎))

皆様、こんにちは。県政知事懇談「湯崎英彦の宝さがし」を始めたいと思います。

本日は土曜日でお休みの方も多いたと思いますけれども、10名の懇談会の参加者の皆様、お忙しいところ本当にありがとうございます。

また、傍聴の皆様もたくさんお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

始まる前に、少し私のほうからこの会の趣旨を申し上げたいと思います。

この会は、各市町にお伺いしまして、10名ぐらいの住民の方と直接お話をさせていただくという会でございます。

県庁というのは、普段市役所だとか町役場の方々とお話をする機会が多いのですが、なかなか直接住民の方とお話をする機会がありません。ですから、住民の方と直接お話をさせていただいて、考えていらっしゃることを知っていくということを目的としています。

なぜそういうことをやるかといいますと、個々の課題の解決をしていくというより、地域の皆さんが普段どんなことを考えておられるか、また、どんな課題があるか、あるいはどんな活動に携わっておられて、どんな活躍をされているのかということ全般をためていって、いつも私は、これは味噌樽ですというふうに言っているのですが、味噌樽のようにためていくと、いい味の味噌ができて、それを使うといいみそ汁ができると。つまり、行政を執り行っていく上での基礎になる味付けのような、そんなものをつくっていく。基盤をつくっていくということでやらせていただいております。

実は別途、市長、町長とも懇談会をやらせていただいております。行政のフィルターのかかったいろいろなお話というのはそちらでお伺いすることにしております。皆さんには、そういう意味では行政のフィルターにかからない直接のお話をお伺いするということが非常に重要でございますので、是非忌憚のない、普段思っているとおりのことをお話しただけると大変ありがたいと思っております。

これから2時間ほどかけて行います。少し長くなりますけれども、なにとぞよろしくお願ひいたします。進行としては、最初90分ぐらいお一人お一人と意見交換をさせていただいて、その後、時間がありましたら30分ぐらい全員でディスカッションをさせていただくというスタイルをとっております。この時間配分も大体の目安ですので、そう固くこだわることはありません。ときどき全員のディスカッションという時間がなくなることもありますが、気楽に進めますのでよろしくお願ひいたします。

懇 談

(知 事)

それでは早速始めさせていただきたいと思います。最初は内海さんからよろしくお願いいたします。

(内 海)

座ったままで失礼します。今日は世羅までお越しいただきましてありがとうございます。こういう懇談会にも呼んでいただきまして、本当にありがとうございます。

私は、プロフィールにもありますように仕事は酪農をしています。家族経営でそんなに規模も大きくない経営をしておりますが、農業関係、特に畜産関係はここ最近厳しい状況というのを知事さんもよく知っておられると思います。みんなと歯を食いしばって頑張っております。

子どもが2人おりまして、2人とも小学生です。世羅町も来年度は学校の統廃合を控えておりまして、子どもたちが新しい学校生活にスムーズに入っていけるように、いろいろな問題点というか、考えておかないといけないこともあるだろうと思うのですが、そういったことをPTAの皆さんや、先生とも話をさせていただいております。

統合の前には、今、通っている小学校が閉校を迎えるわけですが、地区の方と、地区を挙げてそういう閉校に向けてのカウントダウンというか、ちょっと寂しいのですが、なくなるというより、次へ発展していく。そういった形での閉校へ向けての話し合いも一緒にさせてもらっております。

世羅町内も中心部と周辺部、私達のところは周辺部になるわけですが、子どもたちの通う姿が見られなくなったり、授業中のにぎやかな声とが聞こえなくなったりというのは寂しいことですよね。周辺部がそういったことをはじめとして寂れていくことのないように、それにはどうしていったらいいだろうかと思います。若い世代の人たちがまだたくさんおられると私は思っているのですが、地区の活動とか、見渡してみると、だんだん高齢化しているという気がします。こういったような話は寂しい話になりますので、また次に機会があればしたいと思います。

趣味として、和太鼓をやっています。これは私の地区内の方が元気を出され、ちょうど和太鼓自体が県内でも地区内でもブームになった時期に結成しました。20年ちょっと経つのですが、今現在もあり、ちょっと熱のほうは冷め加減ではありますが、週に何回か寄って、太鼓の練習だけでなく、普通の世間話をするようなことにもなっています。そういった中で、今の甲山中学校さんの文化祭が10月の終わりにあります。3年生の希望者で、私達の持っている曲をベースにした曲というカリズムをもって和太鼓の発表をされるということで、その指導に行かせてもらっています。

生徒さんの練習される時間については、当然学校の中での授業時間にあてられるわけですが、最初取り組まれたころに比べて、ちょっと短縮になっています。これは知事さんに言うべきことがどうか分かりませんが、各学校の方針というか、教育委員会の方針が、そういったところに現れているのではないかと思います。中学生の皆さんのそういう吸収力や、上達のスピードというのはすごいものがあるって、最初にこういうリズムをやりますよと言って、1週間たって、次の週には覚えているのです。何事でもそうですけれども、リズムを覚えるだけではだめなので、そういったものを体に染みこませていくためには、どうしても何回も何回も練習を、単調なことを繰り返すということが大事なのですけれども、そういうことができない、時間が取れない状況になっている。例えば放課後なり、全然違う時間に個人練習をやればというふうにも思うのですが、そもそも時間がとれない状況があるのではないかと思います。せっかく上達がすごい、それだけの力を持っておられる中学生に対して、中途半端なことしかしてあげていないのではないかと最近思います。今回も校長先生や、担当の先生にも終わった後に相談させてもらったのですが、そういった教育内容はどうかかなというふうなことを思います。

次に、本業に戻りまして、私は酪農をしておりますが、知事さんなり、国の農業方針はこういうふうに向いているのか。私達は広島県の酪農組合というところに入っており、牛乳の出荷とかもそこで、メーカーとの取り引きになっているため、生産者と事務関係、組合関係、メーカー、というつながりが見えてこない。一生懸命成分なり、細菌数とか、体細胞とか、そういったことを気をつけて、大事に牛を飼って、そうやって絞った牛乳に何でこう値段が反映されないのか。生産者の思いとか、生産者が頑張ってもそれが反映されないという現実がある。頑張るという意味もいろいろですけれども、特に牛乳を自分で勝手に販売できるかと言ったら、そうではなく、そういう許可をとられている方もおられますが、最近よく聞く6次産業とか、そういったようなものが主体になるようでは、農業も生産する立場からしたら、何か世の中の仕組みというか、流通の仕組みとか、そういったものも全然崩れるというか、6次産業を悪く言うわけではないのですが、そういう付加価値を付けるということが重要視されているような気もして、付加価値は付加価値があるもので分かるのですが、全部が全部それというわけではないですね。それ以外のものはどうなのだろうかと。食に対する考え方というか、結局は生産者と消費者さんとの関係ということにもなってくるかもしれないのですが、農産物をつくる者からしたら、そういったものがうまいことっていないような気はします。

(知 事)

ありがとうございます。いろいろたくさんテーマをおっしゃっていただきましたけれども、学校が統廃合によってなくなるところは確かに寂しいと思うのです。子どもたちの声は聞こえなくなるし、チャイムの音とか聞こえなくなるし、それがあるときには何も思

わなかったけれども、なくなってみると寂しいなと感じられる方は多いと思います。また、学校が遠くなって、通学の大変さもあると思うのですけれども、これは今、広島県で言えば地域だけの問題ではなくて、都会でも子どもたちが少なくなって学校が統合されるということが起きています。日本の人口の問題ですよね。いわゆる少子高齢化というところの少子化ですけれども、広島県内、昔は多いときは年間に5万人ぐらい子どもが生まれていたわけです。これが今2万5,000人なわけです。ということは、半分。だからと言って学校も全部半分にするというわけにもいきませんから、こういうものをどういうふうに維持していくかということが非常に課題で、それでもやっぱり幾つかはどうしてもなくなってしまふということが起きざるを得ないというのが現状だと思うのです。逆に言うと、あまりにも人数が少なすぎて、教育上も大変だということも起きてくるので、ですから、前向きにお考えいただいていると思うのですけれども、新しい中でいかに子どもたちのためにいい教育なり、遠いところを通うけれども、それをカバーするようないいものをつくっていくかということが求められると思います。

それは当然町の教育委員会のほうでも頑張っておられると思いますし、県でもいろいろなことをサポートしています。例えばここは内陸のほうですから、海での体験学習だとか、そういったことを進めたり、子どもたちがいろいろな体験ができるようなことをやったり、そういうのを進めたいと思っています。

あと、酪農の件については、日々御苦労されていると思います。県が目指しているところというのは、6次産業を目指しているというわけではなくて、6次産業化というのは一つの手段で、農家の方の手元に残る収入をいかに増やしていくか。それを進める一つが集落法人だとか大規模化ということですし、一つが6次産業、要するに、生産以外のほかの付加価値を自分の収入にしてくということですよ。従来だったら流通業者さんがとっていたものを農家の方の手元に残るようにするということが6次産業化ということですので、県として6次産業みたいなのは進めているわけですが、そういう意味合いでやっているということです。

おっしゃるように、最後にお金を払っていただけるのは消費者の方なので、牛乳だったら安いと1リットル150円ぐらいから、高いと400円ぐらいまでありますけれども、いかに消費者の方に払っていただけるか。それをまた誰がどういうふうに分けていくのか、というところに尽きるので、なるべく消費者の方に価値を見出していただける製品をつくって、農家の方にできるだけ収入が落ちていくように我々もいろいろ努力していきたいと思っています。どうもありがとうございます。

それでは、大谷さん、お願いいたします。

(大 谷)

よろしく申し上げます。大衆演劇せら温泉で店長をしております大谷といいます。まず、

せら温泉は、大衆演劇と言いまして、役者さん、劇団が回って、今、全国で大体 150 ぐらい劇団があるのですが、各県にもそれぞれ劇場や、せら温泉のように温泉に劇場があるという形で、広島県は今はたしか 7 カ所あります。これは全国で二番目に多いのです。

私は実は和歌山出身でして、大衆演劇を和歌山で初めて見たときに感動しまして、それがきっかけで、次にその劇団が広島のせら温泉にお越しになって、それを見るためにこちらに来たのがきっかけで。

(知 事)

それがきっかけで世羅に居ついてしまったのですか。

(大 谷)

そうなのです。住みついてしまって、ですから、こういった場に世羅町の代表で出させてもらうのは非常に恐縮なのですが、私が和歌山から出てきて、世羅について感じたこととか、そういったことはいいことも、気づいたこととかも広めていけるのではないかとということで取り組んできました。

2 年前に初めて来たときは何も分からないことばかりで、ただ、世羅は空気がいいし、水はきれいだし、人はとても優しいし、観光地がとてもあるというのを感じました。

ところが、入ってからは、世羅の人はどれだけ世羅のことを知っているのかなと思ったのですが、意外と知らない方が多かったり、情報をうまく収集するところが分からないとか、そういったことがあったのです。私はせっかく来たのだから、まちに貢献したいし、地元の人にも愛されるような温泉にしたいと思いまして、そこで、スタッフのみんなとまず世羅について知って、情報を提供できるようにしていこうということと、人とのつながりをできるだけつくって行って、こういう、情報というのが口コミが一番広がるような地域ですので、余計に密着していかないといけないと感じたのです。

私が知った人がいないので、どうやってつながりをつくっていくかというところで、私は結構お酒を飲むのですけれども、紹介していただいて飲みに行ったり、お客様で来ていただいた方で、この後ちょっと一緒というお話をいただいて、すごく親しくしていただいて、そのお酒の場でまた紹介していただいて、たくさんの方とお知り合いになれたのです。非常に皆さん知った中に入れていただけて、こういうつながりが自然とつくれるというのはいいなど。

もう一つは、仕事に関してそれが活かされないかと思ったのですけれども、なかなか現状を見ると、仕事として、例えばいろいろな組織があります。組合、商工会、6 次産業もそうですけれども、そういった中でつながりが少ないのかなと感じられたので、つながりを仕事でもつくっていきたいというところで、今年 1 月から「せらを語ろう会」と言いまして、異業種交流会を、飲み会だったら自然とつながりをつくっていけるとい

ろからの発想で、飲み会を開催したのです。1月だったので新年会を行いますということで、私が知っている方で、お酒の席だったら皆さんすごく熱く語られますので、そういったのでまずつながりをつくっていけないかということで始めました。

そうしますと、最初は25名様集まりまして、今月10回目を行いました。昨日数えて全員で53名の会員になっておりました。もちろん毎回参加される方も少なく、お仕事の関係上1回だけの方もいらっしゃるのですが、その中で、初めはとにかく名刺交換で、まずお話を個々でされていたのが、だんだんとまとまりが出てきて、もう知った顔になってきて、そうすると、それこそ最初私が思ったように、世羅について皆さんとても熱く語られるようになりまして、まちがきれいだという声をよく聞くというお話もあって、じゃあ、清掃活動とかボランティアをしたいよねという声が出たのです。その話を聞いた後で、次回、こういうのがあるよということで、広島のアダプト活動の団体に登録しようということになりまして、この「語ろう会」で団体の登録をさせていただきまして、清掃活動をすることになりました。そうすると、今度はみんなやる気が出てきて、廿日えびすと言いまして、世羅甲山のお祭りが8月20日にあるのです。その話題になったときに、清掃はそのときどうするのかなという話になりまして、当日は公衆衛生のほうが出てやってくれているということで、いろいろな方が来られていますから、その情報もいろいろなところから、こういうことをやっているよというのもお聞きできたのですが、じゃあ、次の日はどうかということでお聞きしたら、近所の人が朝からやっているよということをお聞きしましたので、じゃあやろうということになりまして、自分たちで朝6時から、皆さん仕事がありますので、大体始めるなら朝早くということで、6時からみんな集まって、お祭りの次の日も清掃をしました。

そうやって必ず次の会では前回は振り返った反省とか意見交換をするのですけれども、今みんなでどうなのかと言っているのは、そういった話がこの中で出ても、例えばそれをどこに持っていけばいいか。そういうのももちろんその会の中で話をするのですけれども、次につながっていくような組織と言いますか、組織同士のつながり、そういうものがもっとできるようになれば、もっと活動を広めていけるのではないかと。やった意味があるのではないかとということで、その辺が今、課題と言いますか、もうちょっとやったことが広がっていけばいいな。自分たちが発信できればいいなというふうには感じています。

せら温泉としては、やっぱり人とのつながりということで、農園の方とかもたくさんいらっしゃいますので、野菜を卸していただきまして、店の前で販売していただいて、これはこんなです。こんなしたらおいしいですよというのを自分たちの口で伝えようというのをやっていくようにしてしまして、そして、できるだけ店の中でいろいろなものを楽しんでいただけるということを考えています。

その中で、今度は劇団さんもいらっしゃるということで、逆に、地域の敬老会だとか、そういったのにもお呼びいただいて、劇団さんと出張公演というか、慰問公演とか、そう

いうのもさせていただいています。先日は、たまたま高齢者の方の会と、そのコミュニティーの隣にあります小学校の生徒さんとが集まっているところに行かせていただいたのですが、劇団さんというのは、それこそ来られるお客さんに見せるものなので、小学校の子どもさんに見せるというのがなかったそうなのです。そしたら、子どもさんというのは正直ですから、すごく喜んで、拍手して、握手しに行って、手が洗えないという、そういうような意見もあって、私たちもそういう劇団さんを通してすごくいい体験をさせてもらっています。また、やっぱり地元の人がそうやって喜んでくれていることが少しずつ広まってきたかなということを感じながら、これから、「せらを語ろう会」というのをせっかくさせていただいているので、そういったので広げていくというのと、世羅の温泉ということで、いろいろ世羅の情報を発信していけるような、そういう位置付けになっていければいいなと思っています。

(知 事)

ありがとうございます。大谷さんのお話をお伺いしていると、だんだんと発展している様子がよく分かります。2年前に来られたんですね。

(大 谷)

はい。

(知 事)

これはお伺いしていいのかどうか若干悩むのですけれども、大衆演劇せら温泉に劇団の追っかけではないですけれどもして来られて、それで突然店長になられたということですか。

(大 谷)

いえ、最初はもちろん、寮があって、そこへ入らせていただいてという中から、去年の6月に店長になったのですけれども、それまでは普通にさせていただいていました。やっぱり来たからには貢献したいという思いだとか、今まで和歌山でいろいろ培ってきたものをこのまちにどう生かしていこうか、もっとこのまちがよくなることを発信していけないか、そういうことをどんどん考えていくと、会社も認めていただきまして、店長にさせていただきました。

(知 事)

なるほどね。でも、会社とかお仕事でそうやって輪を広げていく部分だとか、あるいは、世羅の中での地域の活動で輪を広げていくというのが、すごく大谷さんは活発にやられて

いて、そこに磁石のようにだんだん人が増えて、巻き込むのがうまいのではないかという感じがするのですけれども、外から見るとまた別のよさが分かったりしますよね。

(大 谷)

そうですね。

(知 事)

ずっと住んでいると分からなかったりすることもあるけれども、外の人から見ると分かることがあって、それを逆にまた地域の人に発信して、より理解が深まるということもありますよね。

(大 谷)

はい。外からの目というのを皆さんが受け入れてくださいましたので、それはすごくありがたいなと。私も何も知らなかったの、知り合いがたくさんできて、第二の故郷というか、そういう感じがしています。

(知 事)

なるほど。では、世羅に來られて満足されていると。

(大 谷)

はい。ここまでつながりができると思わなかったの。

(知 事)

なるほど。どうもありがとうございます。

では、佐伯さん、お願いいたします。

(佐 伯)

お願いします。農事組合法人「くろぶち」から來ました佐伯です。年齢は 22 歳です。

(知 事)

若いですね。隣にもうちちょっと若い人がいますけれども。

(佐 伯)

ちょっと負けました。

出身は、広島市内の西区の三篠になります。去年の 4 月から農事法人組合「くろぶち」

で野菜づくりを中心とした仕事をしています。今は、くろぶちの中に家を借りて住んでいます。

くろぶちに来たきっかけは、庄原にある広島県立農業技術大学校に通っていたときに、法人との交流会というのがありまして、そのときにくろぶちが参加されていて、後日、うちの法人に来て野菜をつくってみませんかと誘われました。私はもちろん非農家なので、どこかに行かないと農業ができないというのと、農大での2年間では全然勉強不足だなというのを思ったのと、法人と農業をやりたいなという人とのかけ橋みたいなものにならないかなというのを思って、世羅に思い切って来ました。

今は、野菜の栽培を中心としてやっていて、ハウスでほうれん草をつくっています。ほかにもキャベツをつくっていて、今、そのキャベツの出荷の真っ最中です。その作業以外にも、餅加工場というのがあるので、今からの時期はすごくたくさん餅をつくるので、そのお手伝いとかもして、春には田植えの手伝いとか、秋には稲刈りがあるので、私もコンバインに乗せてもらって、一緒に稲刈りをしたりします。

くろぶちに来て2年目になるのですけれども、くろぶちの中に住んでみて、一緒に仕事をしてみて思っていることは、とにかく若い人が全然いない。これはくろぶちに限った話ではないと思うのですけれども、小・中・高校生まではいらっしゃるのですけれども、大学になると、広島とかに行かないと大学がないとかでみんな出ていってしまって、ちょうど私の同年代の世代がぽっかり抜けて、40代、50代というふうに続いていって、いつも仕事をしている人とかも50代、60代の人ばかりで、でも、田舎の中では若い世代と言われている人たちですが、ちょっと寂しい感じです。

あと、組合員さんのほとんどが兼業農家さんということで、仕事をしながら土日とかお休みの日に農業をするという感じで、平日とかは連絡がつかないとか、とにかく農業で仕事をしている人が全然いない感じだと思います。

このままだったらどうなるのかなという感じで、若い人が来なかったら、このまま皆さんの年齢が上がっていくだけで、先が見えている感じで、そのためにも若い人をどうやってそういう法人とかに取り込むかということが問題なのです。私は大学を卒業しても農業がしたいと思っていたのですけれども、農園や、個人の農家さんなど、そういう農業の仕事を先を探そうと思ったら意外に少ないのです。だからと言って、どこかで自分でやろうと思っても、非農家じゃなくても、一人でやるというのはすごく難しいことで、法人とかでも、若い人がいないと思っても、いざ受け入れようにも不安とか、いろいろな面でのリスクとかもあります。湯崎さんには今回もっと農業をしやすい環境づくりというのをお願いできればと思っています。

(知 事)

世羅に来られて、どうですか。生活とか、お仕事も含めて、満足されていますか。

(佐 伯)

正直に言えば、そんな満足ではないのですけれども、いろいろ厳しいこともあるのですけれども、やっぱり自分がやりたいことなので、そこは一生懸命やっています。

(知 事)

やりたいことはできていますか。そこまではっていないですか。

(佐 伯)

そこまでは。とりあえず、今はいろいろ野菜をつくると言ったら、売上げとかも考えないといけないのですけれども、とにかくいろいろなことを経験したい、勉強したいというのが先で、売上げとかはそれについてくればいいかなぐらいなのですけれども。

(知 事)

もっと農業技術大学校で学んだことを生かしていきたいという感じですか。

(佐 伯)

生かしていきたいというのものもあるので、農業の1年というのは、年が変わると、また気候とかも変わって、起こることも全然違って、出る病気とかも違って、毎年1年生みみたいな感じなので、今はいろいろな気候にあわせて栽培方法を変えてみるとか、考えてみるとか、とにかく今は勉強です。

(知 事)

なるほど。ほうれん草は任されているという感じなのですか。

(佐 伯)

そうです。ハウスは一応委託という形で、ハウスは任されています。

(知 事)

それは責任重大ですね。

(佐 伯)

はい。

(知 事)

農業技術大学校を卒業しても就農できない人もいますよ。同級生の中でもいると思うのですが、若い人を受け入れるというのは、佐伯さんがおっしゃるようによく大きな課題で、農業法人とか大規模化をしていったところじゃないと受け入れるというのは難しいので、小規模の兼業農家さんがフルタイムの若い人を受け入れるということはできませんから、県としては、大規模化しているところに就農していただくことを進めていきたいと思っています。高齢化はもっと全体では大変で、広島県の平均の農家の方の年齢というのは70歳を超えていると思うのです。退職をされて、兼業でもう一回される方が若手の新規参入者ということで、60歳とか65歳が若手というのが現状ですから、佐伯さんのような人がどんどん入ってこられるように僕らもしたいと思っていますし、大規模化というのは、そういう吸収をするためにも必要なことで、いろいろな課題もあるのですが、進めていければと我々も思っています。

さっきヤンマーさんがやっている農場にも行ってきまして、あそこでも若い人の研修を受け入れてやっているのですが、やっぱり10ヘクタール以上の畑を持って経営されているようなところで、順番に若者を受け入れて研修をして、独立してもらおうということをやっている県もあります。我々も学びながらやりたいと思っていますけれども、頑張ってくださいね。どんな仕事に就いても、最初は思うとおりにいかないし、絶対に厳しいですから、農業だけではないです。農業での厳しさもあると思いますけれども、是非歯を食いしばって頑張ってください。

(佐 伯)

はい。ありがとうございます。

(知 事)

それでは、お二人の高校生、福本さんと山本さん、お願いします。

(福本 (杏))

よろしくお願いします。私は世羅高校の生徒会長の福本と申します。

(山 本)

私は世羅高校の生徒会副会長をやっています山本と申します。

(福本 (杏))

最初に、私のほうから世羅高校の紹介をして、後で山本さんに生徒会が行っている活動について紹介してもらおうと思います。

世羅高校は、皆さんも御存じのとおり、陸上競技の、特に駅伝で全国的に有名です。昨

年は男子が全国優勝をし、女子も 14 位という好成績を収めています。そして、今年も 5 年連続で男女ともに全国への切符を手にししました。このような陸上競技部の活躍というのは、世羅高校だけでなく、世羅町全体を活気づかせてくれる源になっているように思います。私は昨年の優勝報告会に参加したのですけれども、私が感じたのは、世羅高校の生徒が一生懸命頑張ることで、地域の皆さんと一緒に喜びを分かち合うことができるというのをすごく強く感じました。

今は、陸上競技部のことを挙げたのですが、ほかにも世羅高校の特徴である農業経営科や生活福祉科が数々の大会に出場し、表彰を受けたり、また、地域でボランティア活動も多に行っています。ボランティア活動と言えば、私は吹奏楽部に所属しているのですけれども、町内のいろいろなところで演奏しています。先ほども。

(知 事)

今日もありましたね。来られていたのですか。

(福本 (杏))

はい。演奏していました。

(知 事)

そうですか。御苦労様でした。

(福本 (杏))

このように演奏するときにはいつもたくさんの方々が来てくださって、よかったよと声をかけてくださいます。そのたびに私たちはうれしくなりますし、もっともっといい演奏をしたいという気持ちにもさせてもらえます。

このように、地域の方とつながりを持てるということに本当に感謝しています。

もっと言いますと、音楽以外でも何か地域の皆さんと一緒にできたらいいなと思っています。

(山 本)

陸上競技部や農業クラブなどで全国に名をはせているのですが、それらに所属する生徒だけでなく、生徒全員で全国で活躍できるような学校づくりをしていきたいと思っています。それを実現するために、今、生徒会で毎週 1 回だけですが、挨拶運動を行っています。世羅高校は自分から挨拶をすることがまだすべての生徒に定着できていないところがあると感じています。挨拶というのは当たり前のことですが、その当たり前のことを意識し、地域の方にもコミュニケーションとして進んでできるようになればいいなと私は思ってい

ます。

また、駅伝の里である世羅高、観光のまちである世羅をよりよく楽しんでもらうために、まだ予定なのですが、校内の清掃活動を世羅周辺まで広げていけたらいいと思っています。世羅高校をよりよくすることが世羅のまち全体をよりよくすることに少しはつながっていくと思っています。より貢献できるように、生徒会としてしっかり活躍していこうと思っています。これからも温かく見守っていただければと思います。

(知 事)

ありがとうございます。世羅高校は、駅伝等で有名ですけれども、本当にお話を聞いていると、町全体が高校のことに注目していて、逆に、今のお話みたいに、みんなが地域のことを考えてくれるということで、すごく地域密着型の高校ですよ。それはやっぱり感じますか。

(福本 (杏))

そうですね。はい。

(知 事)

二人とも世羅に住んでいるのですか。

(福本 (杏))

はい。住んでいます。

(知 事)

昔から地元の高校ということで、大きくなったら世羅高に行くんだみたいな、そういう感じなのですか。

(福本 (杏))

そうです。

(知 事)

いいですね。地元に貢献するとか、一緒になっていくというのはね。

いつも高校生の人 cameたらこの質問をするのですけれども、今、3年生ですか。

(福本 (杏))

2年生です。

(知 事)

では、もう1年ちょっとあると思うけれども、高校を卒業したら、広島県とか世羅に残りたいですか。それとも、どこかほかのところにいきたいですか。

(福本 (杏))

私は、世羅とか広島に残りたいです。

(知 事)

よかった。山本さんはどうですか

(山 本)

私も残りたいとは思いますが。ここに帰ってくるかどうか分からないですけれども。

(知 事)

その残りたいと言われるのは、どうしてですか。

(福本 (杏))

私の将来の夢は学校の先生なのですけれども、教えてもらった学校とかで、私も教えていきたいなと思って、自分の高校に戻ってきたいと思っています。

(知 事)

高校の先生になりたいのですか。

(福本 (杏))

私は中学校の先生です。

(知 事)

頑張ってください。山本さんはどうですか。

(山 本)

私は将来保育士になりたいので、今、世羅は園児がすごく減っていたりして、私の近くに保育所があるのですけれども、そこももう少ししたらなくなるという話があるらしく、だからここでやりたいのですけれども、それまであるかどうか分からないので、ちょっと。

(知 事)

なるほどね。でも、やっぱり生まれ育ったところが大好きだということなのですか。

(山 本)

そうですね。

(知 事)

それは本当にうれしいです。これまで何人ぐらい来られたか分からないですけども、最初、成績が悪くて、広島から出たいという人が多くて、最近だんだんと増えてきて、もう勝率は5割を。

(事務局)

7対7です。

(知 事)

これで7対7ですか。まだ7対7ですか。今日2人も出てきて稼いでもらってありがとうございます。

実際、今、若者に広島に残ってもらうというのはすごく大きな課題だと思っていまして、全体でいうと、20代前半の若い人が毎年2,500人ぐらい広島県から出て行ってしまっているのです。入ってくる人もいます。大学とか、あるいは就職でほかの県から来る人もいますのだけれども、出ていく人もいて、差し引き2,500人ぐらい減っています。もっともっと広島の魅力を高めて若い人に残ってほしいし、そのためにはふるさとづくりというのはすごく大事だと思います。

佐伯さんもこうやって広島県の農場に残ってもらって、本当にうれしいと思います。そういうふうに見えるように我々も一生懸命頑張りますので、引き続きよろしくお願ひします。ありがとうございました。

それでは、光元さん、お願いいたします。

(光 元)

失礼いたします。今、子どもの教育の話というか、そういう方面にいったので、そこから入らせてもらおうと思います。私は世羅幸水農園という農園で梨の協業経営の一員としてやっていますけれども、父親としては4人の子どもがおおまして、一番下が中学生です。娘ばかり4人なのですけれども、あとの3人は広島市内の学校に通っています。PTA活動をそれまでいろいろやってきて、世羅の子どもは非常に素朴なお子さんが多くて、先ほど内海さんが言われたように、小学校が統合されてだんだん寂しくなるのですけれども、

教育的には中学校もキャリア教育がされて、非常に地元と密接された教育というか、そういうことを展開されて、職業観とか勤労観を育てるといふ部分では非常にいいことですし、それから、郷土愛を育てていくということで、私たちがいったん地元から出て、勉強して帰ったという感じなのですけれども、世羅のよさというのを改めて見つめ直した中で、将来ここに住もうという人材をどんどん育てていっていただくような教育を展開していただきたいという思いは持っています。

中学校の話もそうですけれども、先ほど世羅高校の福本さんと山本さんがいろいろ。

(知 事)

しっかりしたお二人で、楽しみです。

(光 元)

そうなのです。陸上関係はもちろんですけれども、ほかの部も、職業クラスもありますし、地元と非常に密接した駅伝もあります。そういう学校なのですが、新たに国際交流というような観点で、今年はアメリカと国際交流をして、向こうからホームステイで来られて、またこちらから行ってというような経過があって、私がちょうどその場に携わってアメリカに行ったのです。向こうのお子さんを見ると、若い中でも自分の考えをきちんと述べられるのです。中学生、高校生でも、私立の学校へ行ったのですけれども、校長先生に聞かれると、きちんと自分の考えがはっきり述べられるような教育をされているのです。そういうところを見ると、地元に戻ってみて、果たしてどうなのかという見方もありますし、向こうから来られた方は平和について十分勉強されてこちらに来られていたのです。峠三吉の、原爆の詩人ですね。そのような方もきちんと勉強されて、広島を訪れるということで、平和についてしっかり勉強されてこられたというような経緯もあって、もっと広い視点で、日本は昔から鎖国とか、島国とかいうような言い方をされて、そういう意味からすると国際的にはどうなのかという部分は若干あると思います。

英語が、これはもう中学校とか高校とかに通じると思うのですが、通じないのです。それより私は一生懸命頑張って英会話に通っているのですが、私の能力ではちょっと無理かなと思うのですけれども。

(知 事)

いえいえ、大丈夫です。

(光 元)

通じない英語というのが日本には多すぎるような気がします。書く英語というか、もっと自然に、普通に会話ができるような英語の教育が必要ではないか。国際的な言語で通じ

る言葉ですので、それが大事なのではないかと感じて帰りました。

世羅高校は、地元も、京都に行って走ってもらうまでにはいろいろな資金が要りますので、その意味では、すごく協力的な地域なのです。そこら辺は地域を挙げて子どもたちを育てていて、是非帰ってきてもらえればいいなというふうに思っています。

それと、もちろん農業のことなのですが、梨を一生懸命つくっていますけれども、私はちょうど販売のほうを担当してまして、梨も、いつもいい値段が付けばいいのですけれども、そういうわけにもいなくて、天災があったりして悪い梨ができたりしたら、いろいろな加工品とか、そういうものもつくっていかなければならないということになったら、農業だけにとらわれていなくて、いろいろなほかの産業の方と交流しながら、いいものをつくっていければということで営業展開もしているのですけれども、広島で言えば、もみじ饅頭が人気の商品になりますけれども、第二のもみじ饅頭ではないですけれども、地元世羅に例えば何があるかというふうに聞かれたときに、まだそういうものはなかなか乏しいかなというふうな気がしています。だから、そこら辺ももっと視野を広げて、6次産業という部分では今、いろいろな活躍はできていると思うのですけれども、その底辺を上げるというか、そういうところは他産業との交流を深めながらやっていけたらいいのではないかと思います。

それから、観光客は多いのですけれども、広島とか福山から来られる方が多いです。今日ちょうど開通ということで、尾道、福山あたりから来やすくなったと思います。広島からというのは、かなり前からフライトロードの構想があったのですけれども、だんだんに進んでいるという話は聞きますけれども、そこら辺の具体的な日程とか、そういう部分が少しずつ近くなってきたかなという気がしないでもないです。

(知 事)

今度は橋が開通します。

(光 元)

そうですね。河内、本郷にあるところですね。そこを通れば、広島から来るお客さんも、非常に道が分かりにくいというのをいつも聞くのですけれども、そこら辺が整備されれば、もっと進んでくるのではないかというふうにも思っております。

(知 事)

ありがとうございます。梨の生産をやられていて、ビルネ・ラーデンも有名ですけれども、我々広島県人は世羅イコール梨というのが結構大きなイメージとしてあると思うのです。だけど、外に行くとないですよね。一つは、みんなに知られるだけ生産されないというか、外に出回る前に、広島とかで消費されていくということがあると思うのですけれど

も、それは、販売されているお立場から御覧になると、いかがですか。もっと売れるのになとか、あるいは、売るのはやっぱり大変だなとか、どういうふうにお感じになっていらっしゃいますか。

(光 元)

自然のものについては非常にリスクが多くて、安定したものができるということがないのです。買われる方は、今ごろの流通ですから、非常に品質の安定したものを常に口に入れられることが多いので、農産物というのは年によって、私も 30 年ぐらい農園に入っていますが、若手はいつまでたっても若手かも分からないですけれども、同じ年というのはないわけです。台風が例えば十何回も来るような年であれば、非常に収量が少ない。そういう苦勞はつくる者でないと分からないだろうと思うのです。そういうものを分かっていただけの消費者というか、そこら辺もどんどん増えていってほしいなということと、地元でどういうものができているかを理解してほしいなという気がします。

一つ質問を忘れていたのですけれども、T P P、貿易自由化ということに対して、一応前向きというか、賛同されるような御意見をされていたと思うのですが。

(知 事)

そうですね。

(光 元)

これが県の農政に対してどういうことになるかというのは、まだ時間が要ることだと思うのですけれども、そこら辺のところはどうなのでしょう。今すぐ御返事がいただければあれですけれども。

(知 事)

それは、県の農政に対する影響ということですか。

(光 元)

そうです。

(知 事)

県の農政に対する影響というのは、このままでいくと大きいと思います。どういう経過措置になっていくのか分かりませんが、いきなり競争することになると、価格面での差というのは大きいでしょうから、それは大きな影響があると思います。

ですから、これは並行してやらなければいけないでしょうけれども、どう勝負できるの

かということ、これは逃げないで、腹をくくってやらざるを得ないのではないかと思うのです。逃げていたら、いつまでたっても変わらないし、逆に、例えば農業はもともとさっき佐伯さんのお話にもありましたけれども、いま現状、TPPと関係なく、非常に厳しい状況にあるわけです。これは思い切った構造改革をやっていかなければ、早晚立ち行かなくなりますので、このTPPということも含めて、契機にして、逆に、社会的な注目も高まるので、これをばねに大きく変わっていくことをやっていかないといけないと思うのです。農家の方にはすごく大きな負担になると思います。でも、それは例えば製造業においても、円高であるとか、いろいろなことを通じてすごく苦しい道を通ってこられているわけですね。農家の方もこれまでいろいろな苦勞をされていますけれども、もう一段進めていって、逆に、私は強くなっていったらいいのではないかと思います。

世羅は、そういう意味ですごく可能性が高いと思うのです。県内では恵まれていますし、非常に付加価値の高いものを生産されていますので、これをいかにもっと強くしていくか、あるいは、売っていくかということだと思います。今、御存じのとおり、日本より高い値段で、それこそ日本の梨とか、例えばアジアとかで売れるわけです。輸出するには非常にまたいろいろな苦勞があるのですけれども、実はそういう意味も含めてさっきお伺いしたいと思ったのです。苦勞はあるのですけれども、岡山などは一生懸命売っています。ピオーネ、あるいは梨。これはうかうかしていたら、岡山の梨は買うけれども、広島は買わないよということになりかねないと思うのです。そこはやっぱり私は負けていけないと思っています。

(光 元)

ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございます。またゆっくり別途よろしくお願いします。

それでは、行安さん、お願いいたします。

(行 安)

よろしくお願いいたします。せらワイナリーで醸造長を務めさせてもらっています行安稔です。私は岡山県倉敷市の出身で、今、なぜ世羅なのかと言いますと、妻のふるさとが世羅で、年に何回か世羅を訪れることがありまして、花観光であったり、果樹、果物のおいしさとかすばらしさ、先ほど世羅高生さんのありました挨拶運動ですね。子どもたちが、当たり前かもしれないですけども、すれ違う僕たちに挨拶をしてくれる。それまでは、満員電車でランドセルを背負った子どもが大人に押されながら乗っているのを見ていましたので、子育てをするならこういう土地がいいなと思ひまして、世羅町に移ってまいりま

した。

私は本当に世羅に住みたいと思って、どうせ住むなら世羅にかかわる仕事がしたいと思った中で、ワイナリーと出会うことができ、今、勤めさせてもらっているのですが、そういう同じ思いを持っていても、なかなか仕事がなく断念していく方もいらっしゃると思いますので、もっとそういった思いのある方のチャンスが開けていければいいなと思っております。

せらワイナリーは、2006年の春にオープンいたしまして、その半年前の2005年の秋からワインづくりを始めております。世羅は梨というイメージなのですが、梨に次ぐ次の果物ということでブドウが選別されて、ブドウの産地化をつくっていく中で、ブドウの加工品も同時に進められてワイナリーがつくられました。当初は、町内でとれたブドウは6トンぐらいで、そんなに多い量ではなかったのですが、他産地からブドウを買ったりしてワインづくりを行っていたのですが、今年は70トン、ワインの瓶にして約7万本ぐらいの収穫ができるようになりまして、今後はこのワインをどう広めていくかというのを課題として取り組んでおります。

まだまだ世羅町というのは認知度が低いと思うのです。そのPRの中で、世羅ワインというのを一つのアイテムとして使っただけならなというのは思っております。

(知 事)

ありがとうございます。せらワイナリーも、今やすっかり有名ですよ。

(行 安)

まだまだ、もっともっとだと思います。

(知 事)

すばらしい意気だと思えますけれども、三次のワイナリーと並んで、県内二つありまして、一つの行ってみたいところというので、人気が高いのではないかと思います。

光元さんの梨園やとワイン、そういうものを一つ一つ増やしていったり、あるいは、今の梨とワインで競争する必要はないと思うので、一緒に手を取り合ってやっていくとか、そういうことで、もっともっとおっしゃるように認知度を高めていきたいですね。

(行 安)

はい。

(知 事)

県もそういうことは後押しをしたいと思っております、それぞれの地域が持っているも

の、これを伸ばしていくということが鍵だと思うのです。ワイナリーにしても、まだ歴史も浅いですし、まだまだこれからの部分は確かにあると思うのですけれども、ワインの製造の面でもあるし、販売の面でもあると思うのですけれども、やっぱり地元でつくったものとか自慢になるものは、それが大きくなっていくと誇りにもなりますよね。さっき高校生のお二人が言ってくれたことも、そういうのに近いことがあると思うのです。誇りにもつながるし、地元が伸びていく、活性化していく種でもあると思うので、行安さんもお若い醸造長ですけれども、是非頑張って、我々も一緒にやらせていただきますので。

(行 安)

はい。地元で根付く、地元の方から愛されるワインを目指してやっていきたいと思えます。今年の仕込みのときに、ブドウの最初の作業とかを小学生に体験してもらって、そのワインを飲むのはまだ大分先になりますけれども、20歳になったときに飲んでもらえたらなど、そういう取り組みをしていく中で、その地域に根付く、愛されるというのを日々考えながら取り組んでいっております。

(知 事)

そうですね。是非。国内でも、小さなワイナリーがだんだん増えていますよね。長野とか、山梨とか、増えています。交流とかされることもあるのですか。

(行 安)

そうですね。西日本、近隣のワイナリーさん、どちらかというところすぐ行くことができる距離のところは結構こまめに回らせていただいているのですけれども、山梨のほうとかも年に1回は行って、いろいろワイナリー同士の情報交換というのはさせてもらっています。

(知 事)

なるほどね。是非よろしくお願ひします。ありがとうございました。
では、吉宗さん、お願ひします。

(吉 宗)

よろしくお願ひします。私は農事組合法人世羅高原農場の代表をしております。現在34歳です。後ろにありますポスターのように、春はチューリップ、夏はひまわりというような、年に3回ほどお花を見せて、お客さんに楽しんでいただける花の観光農園を営んでおります。

(知 事)

きれいですね。

(吉 宗)

ありがとうございます。今日は、湯崎知事に会社の代表として、世羅高原のトップセールスということで、観光振興の最前線でやっている者として、いろいろなお願いとか、取り組みの内容とか、今、考えている構想みたいなものをお話しして、是非広島県全体で中山間地域を盛り上げていくことができればというふうに考えております。

現在、幸水農園の光元さんもいらっしゃいますけれども、果樹の農園も、花の観光農園、それから直売所も、世羅高原の中にたくさんございます。春になりますと、花めぐりと言いまして、複数の花の観光農園をはしごする花めぐりというのが近年非常に人気を集めておりまして、春のシーズンで大体延べ 30 万人ぐらい御利用があります。観光農園というのが都市部からお客さんをお呼び込む一つのポイントになっていると自負もしているのですが、こういった花観光の流れを、観光農園を花形産業にと言ったらおかしいですけれども、収益も上がり、若手も一緒に、楽しそうにやっているからしんどいけど一緒にやってみようというような、そういった若手も参画しやすく、広い農地があつて、世羅高原ならではの新しい形の農業経営というのをちょっとでも広めていけたらという思いで活動しております。

いま現在、9名従業員がおりまして、平均年齢が 38.6 歳と非常に若いです。

(知 事)

若いですね。

(吉 宗)

はい。私自身も 34 歳なのですけれども、観光農園というのが、6 次産業という言葉がたくさん出てきているのですけれども、そういう言葉は別にして、自分でつくったもの、サービスを直接お客さんに見てもらって、そこでの直接的な評価を受けて、その対価として入園料をいただいたり、商品の代価として販売することなのですけれども、私が観光農園に入って楽しいなと思っているのはまさにそこで、自分がやっていることが直接お客さんに目に見える形で感じてもらって。

(知 事)

フィードバックですね。

(吉 宗)

喜んでもらえるし、いけんかったなというときも当然ありますけれども、それはそれで

評価をいただいて次につなげていくという、お客さんと直接触れあうことができる、お客さんの声を聞くことができるというのが一番の醍醐味だというふうに感じています。

私そのものも、もともとは世羅に帰ろうとかあまり思っていなくて、たまたま大学時代に観光農園のアルバイトをして、まちから来たお客さんが世羅のことをほめてくれるわけです。私は当初そういうのはあまり感じてなかったのですが、花がきれいじゃね、広いねとか、こんなのどうやって植えるんみたいなところから始まって、世羅の人は優しいねとか、道案内もいろいろしてくれてじゃし、道路もきれいじゃし、空気もおいしいとか、そういう地域丸ごと観光農園の現場でお客さんが評価してくれちゃったのです。直売所の野菜もおいしいとか、それがとても自分自身うれしくて、地域に帰って頑張ろうという強いモチベーションになっていますし、それは今も続いています。ですので、世羅で生活していてよかったとか、そういう思いを少しでも感じてもらえるような地域の魅力を生かした観光農園を伸ばしていければと考えています。

図らずも今日は世羅インターチェンジができて、尾道から松江まで将来的には2時間半で結ばれる高速道路ができると。観光農園にとっては、新しいお客さんを呼び込むまたとないチャンスと考えています。もちろんストロー現象等々で外に出て行くのではないかという意見もあるのでありますが、私は全くそういうのは考えていなくて、前しか見ていないと言いますか、ここ3年ぐらい、関西方面からのお客さんが非常に増えておりまして、日帰り、宿泊を問わず、世羅の花を見て、広島に泊まったり、日帰りで帰ったりとか、そういうお客さんが徐々に増えてまいりました。ですので、そういった流れをまた一つ新たに観光振興につなげていって、観光農園そのものにたくさんお客さんが来るようになって、元気にやっている。それを見て、また自分たちも頑張ろうとか、何かしら観光農業というところにスポットが当たるようになってくればいいなというふうに思っています。

今日、実は知事のほうに観光の資料をつくったものを持ってまいりましたので、見ていただこうと思って。

(知 事)

ありがとうございます。

(吉 宗)

現在、世羅町では観光協会も新しくできまして、若い課長も一生懸命世羅の観光振興に努めております。私たちも、せらワイナリーにも若い方もいらっしゃいますし、花の観光農園も二代目が若手経営者として育ちつつあります。そういった若い人たちと一緒に観光キャンペーンをしたり、世羅にはこういうところがあるのですよというふうにPRしております。

花の観光農園とワイナリー、世羅のことだけをやっているのではなくて、先ほどの世羅

インターができる、尾道から松江まで縦線ができる。そこで、世羅インターが開通したので、今、世羅だけがいいから、世羅だけのことやっていこうというのではなくて、これが全通の第一区間、駅伝で言えば、第一走者が走り出したというようなイメージで、何とか沿線がこの道を機にして、今まではワイナリーがあっても、限られたお客さんを奪い合う、いわばライバルとか競合相手という形で、なかなか交流とかしにくい状況もありました。ともすれば、隣のことは知りませんよと。よそのことみたいな、そういったおもてなしが行われがちだったと思うのです。ですので、それをお互いが協力し合いながら、この一つの線を使って大きな観光客誘致、お互いがお互いを紹介し合って、その中で個性を伸ばしていく。世羅は世羅のよさがあるのですよというものを言って、ほかの施設もこういうものがありますというふうにお客様に案内して、それもおもてなしのスキルアップで、何かしら三者にとってウイン・ウインの関係がつかれる。そういったことを目指して、そのファイルの中にもありますように、海の道ではないですけれども、山も頑張っているということで、フラワー&ワイン街道という構想を起ち上げまして、全く個人的に勝手に活動してやっております。

(知 事)

意外と近いところにもあるんですね。

(吉 宗)

そうなのです。島根もあります。奥出雲、それから三次、世羅と、大きなワイナリーもありますし、国内に規模を誇る花の観光地もたくさんありますので、これを結ぶような街道づくりを全通に先駆けてやれば良いということで、世羅が一生懸命頑張っておりますので、是非、海だけではなくて、山のほうにも目を向けていただきまして、観光農園も頑張っているぞということで、よろしくお願いします。

(知 事)

ありがとうございます。いつも海だけじゃなくて山とも言われるのですけれども、山も一生懸命やっておりますので、逆に我々もやっているということをお認めいただけると大変ありがたいと思います。

でも、本当にきれいですよね。

(吉 宗)

ありがとうございます。

(知 事)

今日、世羅を回ってしまして改めて思ったのは、本当に台地で、緩やかな丘陵がずっと続いて、北海道と比較する必要はないと思うのですけれども、広大な感じで、すごくいいですよ。ただ広いというだけではなくて、緩やかに起伏があつて。

(吉 宗)

それが今、世羅の花畑の魅力になっているみたいです。

(知 事)

そうですね。やっぱり、まさにこういう感じですけども、いいところも本当にたくさんあるので、吉宗さんみたいにそうやって頑張っていたらと、世羅が輝いていく。ほかの地域でも、近いところと言えば尾道にしても、宮島にしても、既に観光地ですけども、もっと頑張ってお客さんに来てもらう。そうすると、今度は尾道に行つて、世羅に寄つて帰ろう。大阪の人が山陽道で来て、北へ上がつていって、最後は中国道で帰ろうとか、そんなふうにもなっていくわけですから、本当に協力して、協力の中に切磋琢磨していただけるとありがたいなと思います。

(吉 宗)

そうですね。

(知 事)

我々も、今度県のビジョンというのをつくっているのですけれども、その中でも、海の道構想とかいろいろなものを行っていますけれども、主役はやっぱり県民の方だと。吉宗さんのような方がそれぞれ頑張ってくださいることが本当に広島県をつくっていく。そういうコンセプトでやっています。

(吉 宗)

ありがとうございます。あと、広域連携という話がたくさんあるのですけれども、現場としては、町の垣根、市町村の垣根は全く関係なしに動いているのです。ただ、観光振興というのが、それぞれ市町村の振興策の中に位置付けがあつたりして、そういった中で私どものような民間人が勝手に立ち上げたような構想になかなか乗れるわけもないと言いますか、その辺、やっていくのに、ちょっと進んではとまって、というようなことが恐らく今後も続くと思うのです。ですので、その辺、広域連携が現場レベルでスムーズにいけるような仕組みを、事業一つするにも、下りてくるころにはかなりその意義みたいなものが薄まっているということがままするので、そうではなくて、本当に現場の力が120%ぐらい出るような、そんなことを、直接お話をいただいたりとかできればいいと思います。

名刺も中に入っておりますので、世羅のことは何でも聞いてください。よろしくお願ひします。お電話お待ちしております。

(知 事)

ありがとうございます。すばらしい営業で、ありがとうございました。
それでは、高橋さん、お願いいたします。

(高 橋)

世羅町商工会青年部部長をやらせてもらっています高橋と申します。商売のほうは、有限会社高橋装飾で、インテリア用品の販売、施工などをやらせてもらっています。

(知 事)

小売りですか。

(高 橋)

はい。

まず、商売のほうなのですけれども、今、吉宗さんが言われたように、観光のほうは頑張っておられるのですけれども、ちょっと暗い話になりますが、世羅町の商工会のほうは、どこも一緒だと思うのですけれども、シャッター通りになり、うちの店でも、祖父、親父、僕で三代目になるのですけれども、そのころはカーテン、じゅうたんなどのインテリアの物を売っていたのですが、今は施工が主な仕事になっています。商売と言ったら物を売る仕事なのですけれども、八百屋さんが減り、電気屋さんが減り、だんだんシャッターが閉まって行って、観光のほうはにぎわっていくのですけれども、まちで頑張っている商売のほうが廃れていっているのです、頑張っていきたいのですけれども、何かみんなでいい案がないか模索しています。

それと、大型店の進出で、うちら小売りには相当響いています。電気屋さんにして、八百屋さんなどは一番最初にダメージがありましたね。僕らも小さいころは近くの八百屋さんへお菓子を買に行ったりしていたのですけれども、今度はそれもできなくなり、シャッターで、子どもたちも少なくなって、静かな通りになっていくのが寂しい現状です。

話は変わるのですけれども、今度は青年部の商工会活動のほうですけれども、泥んこバレーというのを行っています。これは合併前に旧世羅西町が行っていた行事で、引き継いで今やっています。当初は50人ぐらい集まってもらっていたのが、今年は200名強集まってもらって、世羅の田んぼの中でみんなどろどろになって頑張っていく姿が、僕たち商工会員も、普段はなかなか集まってもらえないのですけれども、そのときは皆さん集まってくれて、その行事ができていることは商工会青年部としても誇りに思う行事で、また来年、

再来年と続けていきたいと思っております。

それと、商工会のほうも、青年部員は 50 名強ぐらいいるのですけれども、それもなかなか自分のところの商売がうまくいかないの、出してもらえないことが多くて、いつも定例会など開くのですけれども、実質 10 名ぐらいの集まりで、なかなか集まりが悪いので、次のやることができない状態が多いです。この泥んこバレーだけは続けていきたいと思うのですけれども、なんとかみんなが来る、活気ある商工会にしていきたいです。

それと、同級生と話すのですけれども、世羅町を出て行った人たちなのですから、今はまちで働いていて、働く場所があったら帰ってきたいという人がかなりいるので、今日でも道路が開通して、世羅は交通の便もよくなってくると思うので、企業誘致とか、そういうのがあったら、やっぱり人が増えないことには商売もどうかなというところがあるので、そんな話をしています。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。

泥んこバレーっておもしろいですよね。

(高 橋)

ありがとうございます。

(知 事)

だんだん人気が出る理由も分かる感じがします。田んぼで思い切って暴れるということも実はあまりできないし、そこでバレーをやるというのは、ビーチバレーよりよっぽどおもしろそうな感じで、いい着眼点だなと思ったのですけれども、今のお話で、商工会の会員さんもやっぱり大変な現状があると思うのです。これは各地でそういうことが起きていて、大型店、日常の生活がスーパーだったりホームセンターだったり、そういうところで買い物をすることになってきましたので、本当に地元の商店街の皆さんが大変だというのはそのとおりですよ。私は、多分その問題を商工会の皆さんだけで解決するのは難しいだろうなという気がして、例えば世羅であれば、まさにワイナリーだとか、農園というのが一つの強みになっていますから、そういう皆さんといかに協力してやっていけるか。広島県内で人口が減っていないところはないわけで、広島市も含めて全部減り始めていまして、どこかだけ増えるというのはなかなか難しいと思うのですけれども、その減り方をいかに抑えるかという視点はあると思います。そういう中でも、来ていただけるお客さんというのはたくさんつくることができますから、そこからやっていかないといけないだろう。広島県全体でもそれはあって、なるべく減るのを少なくしたい。おっしゃるように産業というのは非常に鍵で、働くところがないと広島県に残っていただけないので、我々

もそれを頑張っていきたいと思っています。

そのときに、繰り返しになるのですけれども、やっぱり広島県の持っている強みをベースにしたいと思うのです。世羅は世羅の強いところをベースにしていかないと、一時的なもので終わってしまったりしますし、県北のほうでも、例えば工場が来たんだけど、やっぱりすぐ出ていってしまうというようなことが往々にして起こっているのです、しっかりと根付くものをつくれたらなと思っています。

我々若い世代、今日、この会でこれまでになく平均年齢が若いです。これまででかつてない若さで、世羅に元気な人がたくさんいるというふうに思うので、是非、我々も応援しますので、頑張ってくださいと思います。

(高 橋)

ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、平川さん、お願いいたします。

(平 川)

よろしく申し上げます。本日4人目のよそから来たというか、8年前に広島市内の竜王町からこちらに参りまして、今は建設業を営んでおります。

今、土木業をやっているのですが、インフラ整備ですね。公共事業というのはだんだんと減っていく中で、地元の農家の方から仕事を依頼されることも多々あるのですが、そこでお話を聞くことは、まず、農家の方が第一声に言うのが「米が安い」と。米が安くてどうもならんとみんなおっしゃるのです。僕らもそういう方がいるから、公共事業が減っても民間という形で個人の方から仕事を請け負って仕事をさせてもらっているのですが、その人たちが、米が安いだから、ちょっと安くしてくれと。とにかくうちもそれを聞いたら儲けちゃいけないのという感じでやらせてもらっているのですが、ちょっと寂しい話ですけども、先ほども光元さんからあったように、TPPの問題ですごく懸念をされているのです。泣きっ面にハチではないのですが、まだ悪くなるのかという感じで、米が売れんようになったら、TPPの参加で言ったら中国のほうはまだ慎重というか、参加するような経緯がないみたいなのですが、もし中国がこれから参加してきたら、品質そのものも上がってきているわけですから、農産物、こちらでいうと米、野菜に関しても、かなりの打撃があるのではないかと考えています。直接僕らは関係ないと言えないのですが、間接的にそういった仕事なくなると、公共事業が減っている中で、ちょっと将来どうなのかという疑問をまず持っているわけです。

あと、公共事業とか、まず、第一に挙がってくるむだ削減、今、はやっています。国会でもやっている事業仕分け、公共事業に関しては去年行われたと思うのですがけれども、そういった中で、公共事業、そういったものが、やっている側というか、そういう企業に携わっている私のほうからみたら、ちょっと世論的に公共事業は悪いというような感じに映っていると思っているのです。

(知 事)

でも、命を守る公共事業もたくさんありますからね。

(平 川)

そうですね。今年も災害があつて、去年も大きな災害があつたのですがけれども、災害があつたら、まず、近くの機械を持っている会社、うちもそうなのですが、行ってくれと役場のほうから依頼を受けるわけです。役場のほうにも、住民の方々から道路が通れんじやないか、木が倒れているというので電話がすごくかかってくるみたいなのです。実際、今は世羅町の建設業者を見回しても、みな従業員は少ないです。事業を縮小みたいな形でやっていますので、いざ出ろと言われても、人がいないわけです。そういったところで、かたや何かあれば、僕らは行かなければいけない。行かされるというところとちょっと語弊があるわけですがけれども、まあ、行くわけです。それに対して世論的には悪い、悪業みたいなところが根付いているところがあるので、相反するところがあるなと思ひながら、寂しいなと思ひながらやることもあるので、是非公共事業は悪くないというのを声を大にして言っていただければと思うわけです。

もう一つ、僕も隣にいる高橋部長のもとでやっている青年部員なのですが、先ほどもおっしゃったように、人はおつてもなかなか仕事の都合で出てこられないわけです。私も、こつちに帰ってきてても全く知った人がいなかったのですがけれども、青年部活動、地元の消防団の活動とかを通して、たくさんの人を知ることができました。いいところと、悪いところ、世羅に帰ってきて、もともと祖父母がこちらにいたので世羅に帰ってきたのですが、まずいいところは、人は少ないのですがけれども、お酒を飲む席で、普通にお酒なしでも、人が少ないので、同級生だけのくくりだと話にならんです。私は 32 歳なのですが、下は 20 歳ぐらいの子から上は 40 代、50 代の方から、一緒にお酒が飲めるのです。

(知 事)

自然と縦のつながりができてくるということですね。

(平 川)

そうです。固執してというのがまずないので、すごく気さくな方が多いですし、本当に

世羅というところはいいなと今でも思っています。

それと、近所を歩いていたら野菜がもらえるのです。元気という感じで話しよったら、白菜をあげようとか、ああいったのもなかなかまちのほうではないのではないかと思って。

(知 事)

ないですね。

(平 川)

温かみのある、人情あふれるところなので、僕はすごく好きなのですけれども、さっきもちらほら何人かあったのですけれども、やっぱり青年部に入ってきてもらおうにも、若い人がいないですね。今日初めて会ったのですけれども、大谷さんにしても、佐伯さんにしても、ほかのところから来たというのを聞いて、若いので、もうちょっと情報発信して、アピールしていけばよかったと。

(知 事)

お互いの会に入るといふことで。

(大 谷)

はい。いいですか。

(平 川)

はい。是非。

(知 事)

取り引き成立ですね。せらを語ろう会に入って、商工会青年部に入ると。

(平 川)

是非よろしくお願いします。

(大 谷)

お願いします。

(平 川)

何だったっけ。

(知 事)

混ぜ返してすみません。

(平 川)

いえ。是非若い人が入って、IターンでもUターンでもいいのですけれども、是非来てもらえるように、何とか県政のほうでも調整というか、してもらいたいと思っています。

あと、農政ですね。これからの農政、もうちょっと、やみくもに税金を突っ込むというのもちょうとどうかと思うのですが、先ほどもおっしゃられたように、平均年齢というのはすごく高いですから、新しく何かを始めるといのはちょっと難しいかなと思うのです。何か助けになるようなことを、誇りを持ってできるようなことを僕らもやっていこうと思っていますので、是非そこら辺もよろしくお願いします。

(知 事)

よろしく申し上げます。ありがとうございます。

いろいろなところでお話を伺っていると、いい点というのは悪い点になり、悪い点とか弱い点は強い点とかいい点になるのです。人が少ないというのは、ある一方ではハンディーだけれども、そういうつながりが広がったりとか、濃いものになったりということもあるし、学校などでもそうなのですけれども、まちの学校がみんなすごく幸せかという、必ずしもそうではなくて、世羅なんて比較的大きいほうですけれども、本当に小さい学校だと、周りの人がすごく面倒を見てくれるし、生徒のつながりがすごく強くなったりとか、でも、実際に小さな学校で教育するというのは大変な面もあるのですけれども、やっぱり裏腹の関係はいっぱいありますよね。私はいいほうを見るようになるべくしようとしているのですけれども、そうやって見ると、世羅もいっぱいいいところがありますよね。そうやって見なくてもいっぱいいいところがありますから。ありがとうございます。今日は一つ成果が出たということで。

(平 川)

すみません。知事に橋渡しをしてもらって恐縮でございます。

(知 事)

よろしく申し上げます。

お待たせしましてすみません。福本さん、お願いいたします。

(福本 (ア))

私は、今せらにし女性会の会長をしております。知事とは二度目です。県女連の総会で

お世話になりました。

(知 事)

ありがとうございます。

(福本 (ア))

今度は1月22日にまた女性会の集いでよろしくお願ひします。

(知 事)

よろしくお願ひします。

(福本 (ア))

この場の平均年齢をぐっと上げまして、すみません。

(知 事)

いえいえ、でも、普通は80歳とか85歳とかが一番上ですから、本当にありがとうございます。

(福本 (ア))

そうですか。ではちょっと自信を持って。

まずは、県知事の御就任1年ですね、あさってですか。

(知 事)

はい。

(福本 (ア))

おめでとうございます。

(知 事)

ありがとうございます。

(福本 (ア))

それと、今、イクメンの話とか昨日もテレビでされていましたがけれども、育休のこともちょっと大阪のほうで問題があったと思うのですけれども、私の周りでは賛成派が結構多いです。何パーセントとか、反対のほうの数字のほうが多かったように思うのですけれど

も。

(知 事)

でも、昨日のアンケートでは、賛成のほうが多かったです。ありがとうございます。

(福本 (ア))

皆さん、広島とか、あっちからこっちから、世羅じゃない人が来られていますが、私も実は、あれから 40 年ではないのですけれども、38 年半ほど前に備後の府中のほうからこの世羅に来まして、もうすっかり世羅人になっております。やっぱり世羅が大好きです。

4 年ほど前、介護福祉士をしておりましたけれども辞めて、女性会の会長を受けたのですけれども、若い人も集まらないと言われましたけれども、結構女性会でも、高年齢でも集まらないのです。それと、会員になる人がいないというので、今、減るばかりで、やりがいのような会を受け持っております。

この会に出ささせていただいたのは地域づくりということで、私は平成 2 年 1 月から、うちのほうのわずかな集落の、20 軒ばかりの集落なのですけれども、そこの地域でかわら版というのを勝手に発行したのです。回覧板を回したら、すぐ回さんといけんというので、あまりよく見ていないのです。日にちとか、時間とか、集合場所とかがあいまいなことがあります。それをきっかけに、手書きで始めたのです。そしたら、やめられなくなったというか、回が重なるごとにやめられなくなりまして、今月の 12 月で満 21 年を迎え、252 号になりました。

(知 事)

すばらしいですね。

(福本 (ア))

それを今年の 1 月に中国新聞のほうで取り上げてもらいまして、それが社団法人日本善行会という方の目にとまったみたいで、推薦いただきまして、自慢というか、この間、20 日の日に明治神宮の参集殿というところで表彰していただいて帰りました。

(知 事)

そうですか。おめでとうございます。

(福本 (ア))

ありがとうございます。そんなことをしております。

それと、どこでも、今、地区社協の勧めでふれあいサロンというのを開設されているのですが、その試験的な、実験的なもので始めてくれないかということで、平成8年にうちのほうで始めまして、毎月1回なのですが、まだ1回もお休みせずに、今、173回を終えました。

(知 事)

本当に継続は力なりですね。

(福本 (ア))

それだけ、とにかく続けることで、1回休んだらできないとかいうようなことがありまして、今も続けております。

今、平川さんが言われたように、歩きよったら野菜をくれてと言われるのですが、その野菜も「はい、ありがとう」と言って受け取ってもらえれば、ですけども、田舎の人は結構律儀なのです。もらったから、何かお返しせにやというようなことがあるので、うちでは腐って捨てるけれど、どうしようかというような、そんな野菜を、じゃあ100円ぐらいで売ったら遠慮なしに両方がうまくいくのではというので、野菜市を月に2回開催して、それが地域のコミュニケーションというか、そういう場になっているのではないかと思っ、て、5~6人で始めたことが、みんなその気になって、いい気持ちになっております。

それと、20年くらい前に、我が家の庭に大きなもみの木があるのです。それに遊び半分、遊び心でイルミネーションを付けたのです。

(知 事)

クリスマスの。

(福本 (ア))

そうなのです。そしたら、反響が大きすぎて、やめられなくなって、いまだに。

(知 事)

これも継続ですね。

(福本 (ア))

そうなのです。今年はどんなのをするのかと楽しみにしてもらって、どういう考えでやるとか、そんなものではなくて、思いつきで。やめられなくなって、そしたらまた今度やめられないことができて、その庭に、夫の会社に風船でつくったサンタクロースがあるのです。3m、高さが5mで。

(知 事)

大きいですね。この天井ぐらいですね。

(福本 (ア))

これより大きいのではないですかね。直径が 3m ぐらいの大きなサンタクロースが、今まで三次プラザとかパオとかに出稼ぎに行っていたのですけれども、いろいろ事情がありまして、老朽化して定年退職しまして。

(知 事)

サンタクロースはもともとおじいさんですけれどもね。

(福本 (ア))

定年退職して、うちの庭で去年から立って、ちょっと高台にあるので、見渡しているのです。

(知 事)

もみの木にびったりで。

(福本 (ア))

そうなのです。夫婦とも遊び心が多くて、電気代が気になりながら、でも、これが地域のため、というか、明るい話題にでもなったらどうかと言いながらやっているのです。そしたら、遠くのほうからでも結構それを見に来られて、これって普通のお家ですかと聞かれるのです。はい。普通の貧乏屋ですと言えば、そうですかと。結構記念写真などを撮ったりして、帰ってもらっています。そういうふうには、ばかなことばかりをしています。そういうことで、年をとった最後の福本です。ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。大変活発にやられているということで、一つ一つは肩にすごく力を入れてやられていることじゃないかもしれませんが、継続するのが大変だと思いますけれども、それが地域に明るさを灯していくと本当にいいですね。福本さんみたいな方が 1,000 人いらっしゃったらすごいまちになると思います。是非続けていただければと思います。

(福本 (ア))

はい。どうもありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございます。

自由討論

(知 事)

ほぼ時間になってきたのですけれども、スタートが5分ぐらい遅かったのもうちょっと大丈夫ですかね。ちょっとだけお時間をいただいて全員でディスカッションを、先ほどから何回か、TPPの話も出ているのですけれども、今日の参加者の方は内海さんから始めて、酪農を含めて、農業関係者の方が多いのですが、世羅の強みというのは、私は一つ農業というのが大きくあるのではないかと思うのですが、その点について皆さんの御意見をいただけないかと。県内でも世羅は強いところだと思うのです。その世羅の中で、皆さんはどういうふうにお考えかという御意見をいただければと思うのですが、どなたかいかがでしょうか。

(福本 (ア))

佐伯さんのような若い人が農業に携わっているのを見たり、聞いたりして、すごくええーとか思うのです。農業は今、結構引いているじゃないですか。農業従事者でも、農業はいいことにならんというので。

(知 事)

実は若い人で就農したい人というのは結構多いのです。ただ、なかなか実際に就農に至る道筋が。

(福本 (ア))

それで、テレビなどでやっているのに、モー娘ではなくて、農娘というのをやっていますよね。ああいうような感じで、呼べないかと思うのですけれども。

(知 事)

まさにそういうことで、先ほども申し上げましたけれども、ヤンマーさんが今、10ヘクタールで始めているのかな、これは最終的にもっと増やしていかれたりとか、あるいは、今日それぞれ農業組合法人の皆さんがいらっしゃいますけれども、吉宗さんのところも若い人がいらっしゃるわけですよね。ということで、そういうのでだんだん増えてはいるの

です。これをもっと増やしていきたいというのが我々の気持ちです。

(吉 宗)

二点なのですが、先ほどの強みというのには、図らずも、当初、うちは昭和 53 年にできたときはもともと葉たばこをつくっておりました、たばこの原料です。それからの業態転換で観光農園という、広大な農地、それから起伏のあるところを逆手にとったことにできないかということで、標高も高いので、平野部に比べて花が遅く、長い期間咲くというのが地理上のメリットになっているという、その辺の強みをずっとかけあわせていって、観光農園という道筋に至ったのですけれども、その特徴としては、同じような形態の観光農園がたくさんあるという面で、観光が展開できるというのが世羅の強みです。

(知 事)

集積してきたということですね。

(吉 宗)

そうです。そういう産業群、観光農園群があるというのがまた一つ強みではないか。切磋琢磨もしながらやっている。

(知 事)

なるほど。ある意味でいうと、産地ですね。

(吉 宗)

そうですね。

(知 事)

やっぱり産地にならないと、なかなか、それこそ安定した供給もできないけれども、観光、お花畑も産地化しているということですね。

(吉 宗)

そうですね。これは、若手、若い人が就農するということにもかかわってくるのですが、私自身、世羅に対するメリット、悪いところが当然あるのも重々承知しているのですけれども、とにかくいいと言い続けていくことが私は一番大事だと思っています。

例えば農家の方が儲からんとか、おもしろくないとか、辞めたいとか、しんどいとか、要するに、そういうようなことだったら、当然若い方はやらないですよ。そこをいかに楽しく活気のあるように見せかけながら、見せかけながらと言ってはおかしいですけど

も、やるように努めるというか、儲けの出る仕組みをつくっていく。そうでないと、儲けから従業員さん、ひいては若手の賃金というか給料になったり、前向きな投資にもつながっていくということですので、お金が回る仕組みというのも当然つくっていかなければいけないし、そういう意味では、世羅にお客さんが来てくれる。その世羅のブランドをみんなでもう一度前向きにとらえて、世羅の強いところ、イコール世羅ブランドというような認識で、そこにいかに手取りが多く落ちるような仕組みを今の世代がつくるかということで、そしたら、若手の受け入れ先としての法人として体力がつくのではないかと、そういう順序で今、私は考えています。

（知 事）

ありがとうございます。やっぱりその強みを活用しながら、お金が回る仕組み、その最後のところはお客さん、消費者に払っていただくところから、すべてそこからの分配ですから、それを考えていらっしゃって、回るようにされると。で、楽しく、前向きにやるということですね。ありがとうございます。

ほかは、いかがですか。内海さん、お願いします。

（内 海）

吉宗さんの言われる前向きな考え方、やり方は大変重要だろうと思います。酪農という形ですけれども、農業というものは、さっきも言われたように、自分のつくったもの、そういうのが評価されて、買っていただく。うちだったら、牛乳を小学生とかが見学とかに来られて、製品になる前の、出荷する前の牛乳を、殺菌処理も何もしていないのですけれども、飲めるのです。それを飲んで、ああ、全然違うねとか、そういう声を聞けば、うれしいですよ。仕事は何でもそうかもしれないですけれども、自分のやったことが評価されて、それがやっていく価値、力になってくるというのはよく分かります。

ただ、今の酪農の現状は、本当に県内の酪農家戸数もどんどん減っております。将来的なものが見えないというか、将来的な展望が立てられない状況があるのではないかと。私の中で今、感じていることは、日本の酪農ですけれども、将来的に大規模化か、さっきの6次産業ではないですけれども、付加価値を付けていくやり方にしかないのではないかと。大規模化というのは、100頭、200頭規模といった形でないと残っていけないのではないかと。行政のほうも、恐らくそれを進めているのではないかとこの気持ちがあります。ただ、日本の中でそういうことをやってしまうと、これはアメリカとかのまねなのですが、自給率がこれだけ低くて、自給飼料の確保ということが気候的に、最近よく見られると思いますけれども、ロール、草を丸めて、ビニールにくるんでぐるぐる巻きにして、サイレージ化する保存の仕方しかできないところにあって、しかも、そういう牧草地がどれだけ確保できるか。広大な面積という言葉も出ますけれども、それはあくまで開発団地に限ると

思うのです。私の地区でも、法人化して構造改善をされておりますけれども、それに対しての行政のやり方というか、補助金ありきで成り立っている経営というか、そういうのがすべてではないかと思えます。そういった中で、法人のほうへ就農するとか、そういった状況はかなり難しいのではないかと。農業に就農したい。農業をやっていきたいという方がたくさんおられるというのはよく分かります。そういう若い人の声もよく聞くのですけれども、それが成り立っていかないというのは、経営が成り立っていかないわけです。それは、やはり国の農政というものをもうちょっと考えてもらわないと。

(知 事)

そうですね。経営が成り立つ農業にしないと、それはあり得ないということですね。

(内 海)

民主主義の中にあって、競争というのは大切だろうと思うのです。ただ、競争するがゆえに、どうしても落ちていくところというか、生き残っていける前提となるものが規模拡大しかないのではないかとということしか思えないのです。だから、地産地消とかよく言われますけれども、そういったような人口が減っているにもかかわらず大規模化、そういうふうなやり方しか残されていない。ということは、大規模化している反面には、できないところは削られていくわけです。そういったことが不安のもとになっていると思えます。

(知 事)

それは厳しい現状はあるということですね。

(内 海)

そうですね。それを強く言っておきたいと思えます。

(知 事)

ありがとうございます。ちょっと時間が押してしまいましたので、もしどうしてもというのがあれば、よろしいですか。

閉 会

(知 事)

ありがとうございます。それではいったんここで締めさせていただきます。

今日は、長いお時間本当にありがとうございました。冒頭申し上げましたように、各地でいろいろな御意見がありまして、23 市町参りますと 230 人超ぐらいの皆さんの御意見

をいただくこととなります。一つ一つの御意見ももちろん大事ですし、これをまたあわせていって先の味噌みたいなことも非常に大事だと思っています。またこれから、私だけではなく、県庁のスタッフも皆さんのお話をお伺いしておりますので、県の行政というのは非常に長い期間のことを取り扱っておりますので、その中でいろいろお役に立てさせていただければ大変ありがたいと思っております。今日は本当に御協力ありがとうございました。

また、傍聴の皆様も長い時間、2 時間を超える時間にお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

また、これからこういったコミュニケーションの機会というのはいろいろな形で進めていきたいと思っておりますので、また御協力いただければと思っております。

ということで、今日は本当にありがとうございました。